

今、私に出来ること

中 一

私の家のとなりに祖父が一人で住んでいる。

十二年前に祖母が亡くなり、一人になった祖父のために私の家族はA市に引っ越してきた。

祖父は、ここで生まれた私をとても可愛がってくれた。誕生日でもないのにおもちやを買ってくれたり、習い事のお迎えにも来てくれたりした。

私は祖父の庭で花をつんでままごとをするのが大好きで、祖父はいつも縁側で見守ってくれていた。

そんな祖父が、一昨年くらいから失くし物や物忘れが多くなった。鍵がないとか、携帯電話がないとかに始まり、日付が分からなくなって、季節も分からなくなつて、私の名前を忘れてしまうこともあった。私は祖父が大好きだったけれど、何度も何度も同じことを聞いてきたり、私の名前を間違えたりする祖父と話すことがだんだん嫌になつていった。いらいらしたり、面倒くさかったりしたけれど、いつか私や家族のことを忘れてしまつたらと思うと悲しくて怖くて、祖父をさけるよう

になった。

家族が出かけ、私が留守番をしていたある日、祖父が玄関にやってきた。しきりに、

「おばあちゃんがいらないんだよ。」

と言ひ、あせっている様子だった。祖母は、十二年前に亡くなっているし、祖父のお母さんである曾祖母は四十年以上も前に亡くなっている。話を聞くと、祖父は自分のお母さんを探しているらしく、祖父が「おばあちゃん」を探すことは、今回が初めてではなかったので、私は、

「おばあちゃんは、もう亡くなつていないよ。」

と落ち着いて話をした。最初は混乱していたが少しずつ落ち着きを取り戻した様子だった。久しぶりに祖父と話をすると、祖父は以前のように優しい笑顔をだんだんと取り戻し、

「最近ぼけてきちゃったんだよなあ。」

と、恥ずかしそうに笑った。

「じいちゃんは、お母さんが大好きだったんだね。」

と言うと、祖父は、

「いい成績を取ると、おばあちゃんがとても喜ん

でくれて、もっと頑張ってもっとおばあちゃんを喜ばせようと思ったんだ。」

などと、子供の頃の話のをうれしそうに話してくれた。話をしているしわしわの祖父の顔が、ふと子供のように思えた。

「年を取ると子供に戻るんだよ。」

母が前に言っていた言葉を思い出した。これまでできていたことができなくなり、いろいろなことを忘れていく祖父。この、目の前にいる祖父が「昔は子供でお母さんにたくさん愛情をもらったり、時にしかられたり、たくさん経験をしながらい長い人生を歩んできたんだ」ということを改めて考えていた。「祖父は、さびしかったのかもしれない、自分を気にかけて、いつも愛してくれたお母さんのことを求めているのかもしれない」と思うようになり、この出来事のあと、私は祖父とまた話をするようになった。あいかわらず同じ話を何度も何度も面倒くさいと思ってしまうときもあるけれど、私と話をすることが祖父にとっても刺激になると思うし、祖父を思っている気持ちも少しでも伝わればいいな、と思うようになっていった。祖父は、私や姉や兄の学校

での話や、とりわけ活やくした話を聞くととてもうれしそうに目を細めて話を聞いてくれる。そして張り合うように、自分の子供の頃や若い頃の自慢話をする。そんなとき、祖父はとてもじょう舌で表情も生き生きとしている。

認知症は簡単に治る病気ではないと聞いている。しかし、周りの人との関わりをもち、孤独な時間を減らし、自分が必要な存在であることを認識することで進行を少しでも遅らせることができるのではないかと思う。

私の近所にもお年寄りがたくさん住んでいる。高齢化社会が進み、介護職の人手不足など様々な問題も起きているという。それらの問題を解決していくために、私にできることは多くはないが、祖父や近所のお年寄りが元気で毎日を過ごせるように進んで明るいあいさつを交わしたり、話に耳を傾けたりしていきたい。長い人生の中で、たくさん経験をし、困難を乗り越えてきたお年寄りの話は、私たちにとって、とても学びになると思う。

祖父との時間を通して、私は相手の立場になって気持ちを想像することの大切さを学んだ。この

ことはすべての人間関係においてとても大切なことだと思う。これからは、相手の気持ちを考え、行動できる人になりたいと思う。